

釣れ釣れなるままに

2015年思い出の釣行記 PART. 6

丸なる海の恵みを楽しむ 鹿島釣狂

苫前港の5目釣り、いや10目釣りだ

女房が、小さなビニルパックがないかと私に聞いてきた。釣り用の小物や仕掛を入れるためのものを渡した。女房は遊び仲間8人と連んで、苫小牧港からフェリーに乗って東北へと3泊4日の旅に出掛けるのだ。午前中は彼女の病院に付き添っていたのだが、旅行となると病は消えてしまうらしい。それでも、常用薬は1日目の夜、2日目の朝というようにマジックで書き込んだビニルパックに詰め込んだ。女房がいなくなると、押さえ込んでいた釣り虫が疼いてくる。

5月30日は土曜日だ。平日でも釣りに行くことが出来る身分になったのに、わざわざ週末の人混みの中に出掛けるという躊躇いもないではないが、特段する事もなく出掛けることにした。真ガレイの岸寄りの記事も出始めていたので、小平町大楸海岸に狙いを定めて出発した。塩イソメはあるが、万が一の爆釣を考えて生イソメを300gも買い込んだ。大楸が駄目なら天塩1本防波堤もあるぞという思いもあった。

昼過ぎに大楸海岸の駐車帯に着いた。砂浜には釣り人が6名で思い描いていたより少ない。朝まずめで釣れなかった釣り人たちが帰ってしまったのだろうか。様子を伺いに海岸に下りてみた。河口近くで釣りをしていた御仁に聞くとアカハラばかりで平物はさっぱりだとクーラーボックスを開けた。朝からやって手の平級の川ガレイが2枚の貧果だった。更に奥にいた2人の釣り人に聞いてみた。昨日から天塩1本防波堤で釣りをしていたが川ガレイしか釣れなかった。遠別、羽幌、苫前と下ってきたが、どこもパツとした情報は得られなく、とうとうこの大楸海岸で竿を出すことになった。2時間ほどやったがアタリさえ無いとぼやかれた。夫婦連れがやってきた。旦那が先に防潮堤下に降りて、奥さんがロープを使いながら荷物を下ろした。夫婦の息はぴったりで、まもなく三脚3個を並べて、

竿を置き始めた。過去の大釣りが忘れられず、通い慣れた大堰海岸なのだが、今年はさっぱりで未だ真ガレイの顔は見えていない。今日はなんとか拝みたいものだと言ってくれた。

苫前港に向かうことにした。以前、この時期の荒れた日に港のどん詰まりでクロガシラの大釣りをしていた釣り人に会ったことがあるのだ。そのどん詰まりの港内は、コンクリートで埋め立てられて、大きな作業場になっていた。その角に釣り人がいたので、様子を聞くとクロガシラが釣れたとビニルバケツに入った25cm程の物を差し出した。

外防波堤の先端に行ってみる。先端がくの字に曲がっており、昨年カンカイ釣りをした赤灯台も撤去されて、更にその先に立派なものが設置されていた。誰もいないので竿6本を出した。2本バリ3、アミエビを入れたコマセロケットカゴ付き3である。

まず竿を揺らしたのはカンカイ28cmである。昨年12月末に鼻水を垂らしながらようやく手にしたカンカイだったが、この時期の昼下がりにはカンカイとは？ 真ガレイでなくてもなんだか面白い釣りができそう。その後、期待のカレイとは違った小さなアタリはあるものの、ハリ掛かりしない。正体を確かめたいと竿を手に持ち、プルルルッと来たところで合わせが決まった。犯人はショウサイフグだった。これは厳しい釣りになりそう。フグのアタリに嫌気がさしているところに、竿を突っ込む大きなアタリが出た。アカハラにも悩まされていたこともあって、グングンと突っ込んだり横に走ったりする引き込みに少し大きなアカハラでも掛かったのかなと思っていると、その影は白くはなく、アブラコだった。45cmほどもあろうか。思わぬ獲物だったが、今日は釣り大会ではないのでその喜びも半分だった。チョコ、チョコとアタリが出て道糸が更けた。また、川ガレイでも付いたかと、竿を煽ると、これまでの引き込みとは違う。海底目指してグングンと突き刺さっていく。上がってきたのは35cmほどのクロガシラだった。思わず顔がほころんでしまった。あまり期待していない昼下がりには、結構アタリも出て何かの物が釣れてくる。

地元の釣り人が2名やって来て、ルアー竿にエギを付けて飛ばし始めた。豆イカが釣れ出したという情報が出たので来てみたということである。しばらくやっていたが豆イカからの便りが無いので諦めて帰って行った。その御仁は防波堤に付いたテトラ沿いに遠投を掛けるとクロガシラが釣れると言ってくれた。これは先ほど実証済みだ。



苫前港外防波堤先端 テトラ方向にクロガシラのポイントがある

地元の若者が2名、やはり豆イカを狙ってやって来た。今度は、テトラに乗って外海側を狙うようだ。最近積まれた真新しい大きなテトラなので気が気ではない。それも全てが揃ったように斜めに積み上げて並んでいる。万が一滑り落ちたら、私が助けることは出来ない。119番に通報しなくてはならないだろう。そして、私がテトラ沿いに投げている方向に向かってエギを飛ばし始めた。もちろん、エギはすぐに道糸に引っかかった。チョイチョイと竿を操作して難なく外したが、具合が悪い。今度はテトラから下りて私の右横に並んでエギを飛ばした。しかし、豆イカが掛かるようなことはなかった。

船外機の音がして、大きな声も聞こえてくる。防波堤の陰になっているようだが何をしているのだろう。近くによって覗いてみるとカゴを満載に積んだ磯舟だ。二人の漁師が乗り込み、年配の漁師が若い方の漁師に指図をしているようだ。親子だろうか。それとも漁師志望の若者の面倒を見ているのだろうか。しきりに「立つな」とか「動くな」「ロープに足が絡まっている」「よし、錨を投げ入れろ」などと声を掛けている。なんとかカゴを設置して去っていった。こんな港の中でどんな漁が出来るのだろうか？

薄暗くなってきた。真っ暗になる前に夕飯を取りに車に戻ることにした。出したゴミをひとまとめにして手に持ち、念のためキャップライトを点けて防波堤の際を歩いて行った。先ほど漁師が仕掛けたボンデンが浮いている。その際でやはり先ほどの若者2名がエギを

飛ばしていた。まだ、獲物はないとのこと。おにぎりとお茶、酒、ビール等の飲み物を持って釣り場に戻った。アタリは出ていなかったが念のため竿を上げる。何とカンカイとカジカが掛かっていた。暗くなってきたので彼らも夕食タイムにしたのだろうか。

2本バリの1本にサンマを付け替えて、全てを打ち直した。竿尻を一気に持ち上げるアタリが出た。なんだろう。ゴツンゴツンと鋭角に引き込んだ主は35cmほどのクロゾイだった。砂底のなんの変哲もない港である。こんなところにソイが潜んでいようとは、思いもしなかった。続けてガヤが釣れた。アカハラの間合間に川ガレイ、クロゾイ、クロガシラを追加してこの日の釣りは終えることにした。仕掛を上げて、竿をそのままにして引き上げた。

車の屋根を叩く雨音に目がさめた。3時半だった。夜明けまでもう少し時間がある。雨は本降りになってくるのだろうか。朝のニュースを見ながら様子を伺う。4時半、雨が小降りになり、空もキャップライトが必要のないくらい明るくなってきた。カップを着て、替えのイソメを持って釣り場に戻った。相変わらずアカハラばかりが釣れてくる。今朝はアカハラの間合間に川ガレイ1枚の釣果で、7時に引き上げることになった。

釣れた魚は、アブラコ、クロガシラ、クロゾイ、ガヤ、カジカ、カンカイ、川ガレイ、イシモチガレイ、ショウサイフグ、アカハラの10目だった。



フラシに入れておいたアブラコもソイも元気がよかった。もちろんカジカも・・・

帰宅すると、釣友の堀部安兵衛が山菜を届けてくれた。やはり釣友の赤埴源蔵と道北にラワンブキを採りに行った。帰りに北見枝幸の砂浜に立ち寄り、ハマボウフウを採取してきていた。源蔵の畑にも寄って温室栽培されたキュウリや青梗菜、ほうれん草等を届けてくれたのだ。彼には今日の釣果をお返しとして持たせた。



ハマボウフウは酢味噌和えと天麩羅にしていた

岩見沢釣遊会第3回大会

6月14日、岩見沢釣遊会第3回大会が「とんとん会」との合同大会として、笛舞港～東洋港で開催された。この日は明け方に大潮の最干潮を迎える絶好の潮回りで、多くの釣り会がエリモ周辺に殺到した。バスが10台とも16台とも伝えられていたように、日高路では他の会のバスに抜きつ抜かれつしながら、先陣を切るようにして笛舞港を目指した。私が東歌別に下り立ったときには、舟揚場で竿を出している者は誰もおらず、釣り場を自由に選べる状況だった。朝方にはエリモ特有の靄が立ったが、時間が経つにつれてその靄も晴れて汗ばむような天気になった。

東歌別の一番右端にある舟揚場で竿を出した。昨年、カジカやタカノハを釣っていた御仁がいたからだ。仕掛を付けて、振り込もうとすると仕掛が舟揚場に落ちた。そんなに強くは振っていないのに、どうしたのだろうか。前回の大会で根掛かりしたときに、道糸に亀裂が入っていたのだろうか？ 道糸を2mほどカットして、同じものを付けてから振り込

もうとすると、また、道糸が切れてしまった。まだまだ傷が付いているのだろうか。今度は、道糸を強く引っ張って、何度も強度を確かめてから、結び直した。それでも同じように糸が切れる。何度も同じことを繰り返してしまった。よくよく調べてみると犯人はトップガイドだった。

最近、同じ竿を2本立て続けに折ってしまった。1本は元竿から2本目のところを折った。修理に出すと2万円もするということでそのままにしておいた。それから間もなくもう1本も折ってしまった。今度は、竿先だった。それで、ガイドを外してから折れた2本の竿を継ぎ足して1本にして復活させたのだ。その時にトップガイドの向きが変わっていたのだ。ガイドの下側、丁度道糸が触れるところに亀裂が入っており、カミソリの刃のようになっていたのである。この竿は使えないので今日は2本体制になった。

しばらく打ち返すもハゴトコしか上がらない。しかたがないので舟揚場横の防潮堤上に移動することにした。ここでは40cm弱のカジカが2本出た。

北海道釣名人会の森田正実氏が隣の舟揚場で竿を出した。昔はハゴトコしかいなかった場所だが、最近はいいものが上がるようになってきたということだ。カジカを上げたようだ。そして、まだ夜が明けきらぬ潮の高い中で森田氏が渡りの準備を始めた。彼が得意とする100m程沖合の岩まで進もうとしているのだ。そして、海の中への一步を踏み出した。足首から膝までの深さになり、更に腰にまで海水に浸かるようになった。歩みを止めた。更に一段深い溝があるらしい。ストックを突いているのだが、届かないようだ。波が来る度に彼の身体が揺れている。それでも右に左にとコースを変えている。いつもは難なくコースを辿ることが出来るのだがまだ潮が高いらしい。一旦引き上げてきた。そして、30分ほど潮待ちした後、今度はスルスルと先端に渡っていった。

いつもの時間なら漁師の軽トラがひっきりなしに通るはずなのだが、今日は行き交う車も見あたらない。例年より海水温度が上がらなくて昆布が育ちきっていないらしく漁期が遅れているのだ。

私が前の出岬に渡れる時間になった。いつもの通り、いつものように股下ぐらいを渡ってから、遠投に心がけた。すぐにガクガクとしたアタリが出てカジカが上がった。このぶんど大アブラコが出るのも時間の問題だ。しかし、竿を揺らすのはハゴトコばかりで、グングンと竿先を曲げる大きなアタリは出なかった。

潮がグングンと引いた。乗っていた岩より一つ先の岩に上がれるようになった。竿を担いだまま、浅い溝を渡った。その岩に1歩で跨いでから何気なく後ろを振り返った。カラスが荷物のところまで来ていた。慌てて、足を戻そうとするとジャブッと浅い溝に突っ込んでしまった。その下に昆布が敷き詰められていた。滑った。竿を持ったままだから、すぐに手をつけて立ち直ることも出来ない。腰を屈めながらなんとか立ち上がろうとした。しかし、無理だった。お尻が底に付いてしまった。更に寝そべるような姿になってしまったのだ。胴突きに海水が入ってしまった。ようやくそこで竿を離すことに気がつく。手をつきながらバランスをとって、ゆっくりと立ち上がった。隣の出岬では先ほどから女性釣

り師が遠投をかけている。この無様な格好を見て笑いを堪えているのではないかと目を向けるが、気にしている様子はなかった。この尻餅の原因を作ったカラスはと見ると、私のエサバツカンから優々とカツオを啄んでいる。そして、「お馬鹿さん」とでもいうように「クワオウ」と鳴いて、もう1羽の仲間を呼んだ。



左から身長優勝：西川紘一、3位：吉井 博、準優勝：前野達志、総合優勝：矢根政仁

優勝した矢根氏は、得意のオノドリに下り立っていた。着いたときには潮待ちすることもなくオノドリの高い盤に乗ることが出来たのだが、釣果はカジカやハゴトコだった。しかし、明け方、更に深溝を越えて渡った盤で大アブラコや大カジカを引き抜いてきたのだ。準優勝は歌露に下り立った前野氏だった。暗い内に潮待ちの溝でいつものように規定数以上のカジカを上げ、やはり潮が引いた前の盤に出てから、待望の大アブラコを引き抜いたのだ。3位の吉井氏は、やはり得意とする横澗でアブラコ、カジカの大物を釣り上げてきた。

身長優勝は、48.3cmのアブラコを釣った西川氏だった。暗い内は「西川の溝」と自称するところでカジカを捕り、これも自称する「西川の高岩」を岡氏に譲って、自分は名も無き岩で大アブラコを抜いたのだ。

今年のエリモは海水温が低くて不調が続いていた。しかし、各氏が知り尽くした穴場では、その不調のものともせず、稀に見る高得点をたたき出した。海の母なる神は、彼ら

が自然を愛し、釣りを友として、精進を重ねている姿に心を打たれて、大いなる海の恵みを享受することを許したのであろう。



海の母なる神



本日の筆者の釣果



カジカの胃から出てきた内容物。定番の磯ガニともう一つはなんだろう。
切ってみるとなんと煮物にした大根の切れ端だった。

自宅に戻ってから胴突き長靴の内側を洗った。胴突きの内側にはカビが生えて黒く変色している。特に腰回りや下腹部がひどい有様だ。釣り場で小便をもよおしても、用を足すことに躊躇する。いよいよ我慢が利かなくなっ慌て胴長をずり下ろして縮み上がった一物を引っ張り出す。焦れば焦るほどになかなか出てくるものではない。そんな時にチビったりしていたのだ。パンパンになるまで水を胴長に入れて、その中に洗剤を入れてから揉み洗いしたのだ。そして、黒ずんだところにはタワシを当てて何度も擦った。しかし、黒く変色した部分は落ちなかった。